

〔コメント〕

岡村 治報告によせて

中 村 周 作

I. はじめに

岡村報告は、戦国期から江戸時代初頭の流通組織と市場圏の空間再編成について、「市町＝六斎市」の成立と展開という見地から、当該期の都市－村落関係を究明することを目的としていた。そのために、具体的経緯をあらわす事象の豊富な江戸時代前期の秩父地方を中心とした関東西部をフィールドとし、まず、市町の特徴を把握するために、その「かたち」と「しくみ」を検討し、市立＝町立ての状況とその変化を捉えた。さらに、当該地域に定期市場網を存立させた市掛商人の活動とその組織の実態、特性を明らかにしている。本報告は、従来の歴史地理学においてあまり取り上げられてこなかった近世市場町に焦点を当て、その構造と機能を解明した点において、注目すべきものといえよう。

本稿では以下、市庭に関わる都市－村落関係についてと、市庭の風景についての筆者の所感をコメントさせていただく。

II. 市庭に関わる都市－村落関係

岡村報告の意図するところのひとつに、関東地方で中世から近世への移行期において、不連続性の強くみられるところの市立を端緒とする町場（地方都市）の形成と、城下町市場圏に編入される在方市という構図の中で編成される市商人の階層構造を明らかにすることがあると思われる。六斎市の成立と展開を通じて、在中に生じる地方都市の形成史を明らかにすることには、大きな研究意義がみとめられる。岡村氏は、はじめににおいて上記の研究を通じて都市－村落関係を究明する旨を述べている。今回のシンポジウムのテーマ「都市・村落論再考」を十分に意識されてのことと思われるが、このことについて、氏の意図するところは、村に居住する商人団と都市の商人との関わりの中に都市－村落関係を見いだすということになるであろう。そういった意味では、市に参加す

る商人の側からみた都市－村落関係ということができようが、市もしくは町から村へのアプローチ、あるいは逆に村から市へのアプローチ、つまり、市に参加する消費者の側からみた都市－村落関係、具体的には定期市に参集する村人の範囲（市の勢力圏）であるとか、市における集客の規模であるとか、市の果たした役割、市の風景たる喧騒、賑わい、そういった諸々についても言及する必要があるのではないか。そうすることによって、市庭に関する点的な研究が、さらに面的な拡がりを持ちえるのではないかと思われる。史料的な制約によって、そのようなアプローチができないという場合も十分に考えられるところであるが、いま一步踏み込んだ考察のほしいところはある。

III. 市庭の風景——露店配置の意味——

市庭の風景について思うところを述べる。この章では市の開設される場について、道に沿う屋敷内の表座敷で開かれる内見世、屋敷前の1～2間の空間地で開かれる前見世、道路に出て開かれる中見世・高見世といった区分があり、その構造の図的説明の他、その差配にも違いがあったことが指摘された。まさに、市庭の風景（かたち）を明らかにしたところである。

ここでは、このような市見世の構造分析と同時に、消費者（ここでは村人ということになるか）が実際に市に参加する場合に、その構造上買い物しやすい市としにくい市があることを指摘しておきたい。つまり、消費者の側からみた市の構造上の良否ということである。どのような意味で、市の構造上の良否が問われるのか、具体的に話を進めてみよう。

たとえば、今日でも各地の神社・仏閣前で盛大に開かれる縁日市においては、様々な業態の露店が並ぶわけであるが、それぞれの露店が一部だけ儲かり、他は赤字を出すといったことのないように、それなりの収益を得るための露店の並べ方

に、一定のきまり（経験則）がある。細かく説明すると、人、つまり参詣者の最も集まりやすい本殿近く、道が集まったり交差したりしている上座には、ここはだまっけても物が売れる一等地であるから、集客力の比較的弱い高齢者か、婦人の小間物商やその他、付き合いなどの関係で顔を立ててやらねばならない露店商などが配置される。中座には、いわゆる「啖呵売」と称される掛け声・口上を発し、客寄せする露店商が並ぶ。ここでも、本殿への往路は客足が早く、帰路は遅くなるので前者には客足をなるべく止めないような露店、後者に「啖呵売」などが並ぶことになる。下座には、鳴り物を使う露店商や大がかりな見せ物小屋など、集客力の強いものが並び、かつてはサーカスなどが開かれることもあった。また、縁日でよく見かける綿菓子屋などは、最も下の場を好むものである。これは、最近の綿菓子はビニール袋で覆われているので保存がきくのであるが、人が混み合う上座や中座に露店を開くと、途中人混みに圧せられ、せっかく買った綿菓子が潰れてしまう恐れがあること、帰りがけの最後に子供の土産として購入することが多いためである。また、植木商や金物商、竹細工商、陶磁器商¹⁾などの露店が複数出店する場合は、それらを並べて配置したほうが客も見比べて買いやすくなるが、「啖呵売」を並べると喧騒が甚だしく收拾がつかなくなるため、必ず、間に2～3軒「啖呵売」ではない物売りをはさむ必要がある。その他、基本的に大人を相手にする商売群と子供を相手にする商売群とは分けて配置しなければならない。また、露店商の中でもある程度技術の必要な飲食物売り、たとえば飴細工などは、例年同じ場所に出店させることで、その味や技術を求める馴染み客ができ、経営が安定するといったこともある。さらに、市が既存の商店街近くで開かれる場合、店舗のそばに同一商品を扱う露店を決して配置しないというのも露店商の仁義であり、トラブルを防ぐ手だてでもある²⁾。

こうしてみると、消費者にとっても露店商にとってもよい市とは、上記のような経験則を守る「最適露店配置パターン」³⁾を持つ市であり、悪い市とは、そういった経験則に反した露店配置パターンを持つ市ということになる。なお、このような市の露店配置は、かつては、その市をニワバ⁴⁾とする香具師の総元締めが、その責任下に行うものであった。しかし、近年は、全国的に警察による抽選形

式によって場所割りになされることが多く、経験則に基づく露店配置になっていない事例も多々みられる⁵⁾。

以上、直接定期市に関してではないが、縁日市における露店配置の持つ意味について説明を加えてみた。歴史地理学において市場町を分析する史料として絵図があるが、そういった絵図にみられる露店配置を詳細に比較検討するならば、定期市研究においても、上述のような「最適露店配置パターン」を析出することができるかもしれない。市庭の風景を描き出す上で、露店配置の持つ意味について考察することも重要ではないか、この点については従来、あまり注目されてこなかったのではないかと考える⁶⁾。

IV. おわりに

近世市場町の形成史を究明するという岡村報告の趣旨は、研究対象上歴史学などと重なる部分もあるかと思われる⁷⁾。この際に、研究対象や分析史料が同じであるとはいえ、氏の主張するところの「風景論」が、歴史的事象の地理を描き出すといった歴史地理学的手法として、きわめて重要なポイントをなすと考える。

岡村報告では、その結びの中で今後の課題としてあげられているように、①六斎市の果たした機能に関する詳細な分析を、他の地域に拡げてゆくこと、②市町と同時期に進行した城下町の形成を含むわが国の都市形成の地域的特質を解明すること、③定期市場網の存立を都市-村落関係に関連づけて、その地域的多様性と時代的变化を解明することといった面に研究が拡がっていく可能性がある。

樋口節夫氏の言を借りるまでもなく⁸⁾、近世市場町の歴史地理学のアプローチは、数的にも内容的にも豊富であるとはいえない。たとえば、歴史地理学会第39巻特別号「歴史地理学会文献目録-学会40年の歩み-」をみてみると⁹⁾、その中に近世都市に関する研究が27編含まれているが、そのうちの17編までが城下町に関するものであり、市場町に関するものがわずか3編、他に陣屋町、門前町、宿場町などの研究数編がみられる。また、近世の商業・流通の項目をみても、城下町商業に関するものが1編、在村商業に関するものが1編、その他水産物や木綿流通に関するものがあるにすぎない。そういった研究状況の中で、岡村氏のような気鋭の研究者が、今後新しい道を切り開いて

いかれることを確信して結びとしたい。

(宮崎大学教育学部)

〔注〕

- 1) 陶磁器露店については、かつては東日本では「啖呵売」(バサ打ち=叩き売り)が主であったが、西日本ではこの手の品物に対する客の目がこえており、「啖呵売」しにくいといったように、地方による違いもあった。神崎直武『わんちゃ利兵衛の旅』, 河出書房新社, 1984, 68~74頁。
- 2) 露店業種は、時代に即応して移り変わってゆくものであり、ここにあげた中にもすでに失われたものも多い。
- 3) 最適露店配置パターンは、筆者の命名につき、括弧を付した。
- 4) ニワバとは、香具師組織の総元締めが管理・運営を行う市、催物などを含む地域的範囲のことである。添田知道『てきや(香具師)の生活』, 雄山閣出版, 1981, 149~150頁。
- 5) ①北園忠治『香具師はつらいよ』, 葦書房, 1990, 231~266頁。②神崎著書, 前掲1), 168~172頁。
- 6) 石原潤氏は、南インド・ナーマッカル郡における調査で、市出店者の配置の特徴を明らかにしているが、その配置の持つ意味にまで十分言及したとはいえない。石原潤「南インド・ナーマッカル郡における定期市」『定期市の研究—機能と構造—』, 名大出版会, 1987, 303~309頁。
なお、本章に関連する縁日市露店に関する研究を別稿執筆中である。
- 7) 杉森玲子「近世前期における在方市と商人」(都市史研究会編『年報都市史研究4 市と場』, 山川出版社, 1996), 17~31頁。
- 8) 樋口節夫『定期市』, 學生社, 1977, 224~227頁。
- 9) 歴史地理学会編『歴史地理学会文献目録—学会40年の歩み—』, 歴史地理学第39巻特別号, 1997, 11~13頁, 19~20頁。